

女子学生と既婚中年女性におけるソーシャル・ サポート・ネットワークと自我同一性¹⁾

福岡 欣治*¹・友野恵都子*²・橋本 宰*³

Social support networks and ego-identity of female
college students and middle-aged women

Yoshiharu FUKUOKA, Etsuko TOMONO, & Tsukasa
HASHIMOTO

問 題

周囲の人々との間に好ましい関係を維持していくことは、人の一生を通じた重要な課題である。人は、ライフサイクルにおけるそれぞれの段階において、両親やきょうだい、友人といった様々な人々と接触しながら、自己概念を発達させ、また新たな関係を形成していく。例えば Kegan (1979) は、自我心理学の立場から「心理社会的な発達には、他者についての、また自分と他者との関係性についての理解が、連続的に変化していく過程として概念化することができる」と述べている。

こうした他者との関係性が人の幸福や心身の健康に及ぼす影響性は、近年ソーシャル・サポート研究の文脈で強く主張されている(例えばAntonucci, 1985; Cohen & Syme, 1985)。福岡・橋本(1995a)が述べているように、良好な対人関係の存在は、その人の心理的な支えとなつて、日常の社会的な活動のよりどころとなり、またストレスフルな事態に直面したときには、その人が必要とする情報や実際の援助、あるいは情緒的ななぐさめや励ましを与える資源ともなりうるものである。ソーシャル・サポート研究の基本的な主張は「重要な他者から得られるさまざまな形の援助(support)がその人の健康維持・増進に重大な役割を果たす」ということであり(久田, 1987)、抑うつなどの心理的症状やあるいは心臓病などの身体疾患に対する保護的な要因として、数多くの研究がおこなわれてきている(レビューについてはCohen & Wills, 1985; Coyne & Downey, 1991; Veiel & Baumann, 1992などを参照)。

しかし、従来のソーシャル・サポート研究で発達的な問題を取り上げているものは、その大半が児童期ないし青年前期の子どもか、あるいは高齢者に焦点を当てている(例えばAntonucci & Jackson, 1989; Belle, 1989)。わが国の研究でも同様であり(例えば森・堀野, 1992; 野

¹⁾ 本研究は、著者らによる関西心理学会第107回大会(1995)の発表データを再分析したものである。

*¹ 本学専任講師(心理学)

*² 関西カウンセリングセンター

*³ 同志社大学文学部教授

口, 1991など), 結果的に, 青年期の後期から成人期にかけての変化を扱ったものはごく限られている(但し関連分野での例外としてTakahashi, 1990がある). そこで, 本研究の1つの目的は, 女子学生と中年期の成人女性におけるソーシャル・サポート・ネットワークのあり方について, 記述的な知見を提供することである.

ところで, 心理社会的な発達における1つの重要な側面に, 自我同一性が挙げられる. 自我同一性とは, 言うまでもなくErikson (1950, 1959) に端を発する概念であり, 特に自己概念の発達という観点からみるならば, それぞれの発達段階における心理社会的な課題をふまえた, 子ども時代からの過去の体験が再統合された結果としての自己自身についての見方である, と考えることができる(佐方, 1985を参照). そして, 基本的信頼 - 不信から統合性 - 絶望にいたるEriksonの心理社会的発達図式からも明らかのように, 自我同一性の形成は, 青年期の重要な発達課題であると同時に, 生涯を通じた連続した過程として位置づけられる.

こうした自我同一性を含む自己概念の発達は, ソーシャル・サポートがやりとりされる対人関係の形成に, 大きな影響を与えると思われる. なぜなら, サポートの適切な授受がおこなわれる好ましい対人関係をつくり維持していくためには, 社会的な存在としての自己を認識し得ることが必要であり, とりわけCaldwell, Bogat, & Cruise (1989) が示唆しているように, 適切な自己概念を基礎とした自己と他者との複雑な相互依存的な関係の理解が前提になると思われるからである. すなわちCaldwell et al. (1989) は, Marcia (1966) の同一性地位を操作化した質問紙(Adams, Shea, & Fitch, 1979) を用いて大学生193名(うち69%が女性)を対象とする調査をおこない, 同一性達成の程度とサポート源の人数や満足度との間に正の相関を見出している. そこで本研究では, 同一性概念のもう一つの操作化の方向性(鏞・山本・宮下, 1984を参照)である各発達課題の達成度からのアプローチによって自我同一性をとらえ, 成人女性と女子学生の両サンプルにおけるソーシャル・サポートとの関連性について検討することを, その第2の目的とする.

なお本研究はその対象が女性のみ限定されているが, ソーシャル・サポートに関する先行研究によれば, 多くの場合女性が男性よりも量的に豊かなサポート関係をもっていること(例えばBurda, Vaux, & Schill, 1984; Flaherty & Richman, 1989), またサポートが心理的苦痛を防ぐ効果もしばしば女性の方に多くみられること(例えばWohlgenuth & Betz, 1991), さらにストレスへの対処において女性の方が対人的な資源によって左右されやすいと考えられること(例えばBarbee, Cunningham, Winstead, Derlega, Gulley, Yankeelov, & Druen, 1993; Thoits, 1991)などが指摘されている. これらの点をふまえ, また特に近年の女性における社会的な性別役割観の変化などを考えるならば, 女性におけるソーシャル・サポートと自我同一性の問題を取り扱おうとする本研究のアプローチには, 一定の意義を見出すことができるものと思われる.

方 法

被調査者

被調査者は, 成人女性群121名, 女子学生群120名の計241名であった. 成人女性群はいずれも既婚者であり, 年齢の範囲は32~53歳(平均41.32, SD = 4.33)で, うち専業主婦78名, パートタイマー28名, フルタイム8名, その他(自営等)が7名であった. 女子学生群はD大学の「心理学」受講者であり, 年齢の範囲は18~21歳(平均18.81, SD = 0.75)であった. このうち,

欠損値など回答に不備のあった者を除いた結果、最終的な分析対象になったのは、ソーシャル・サポート尺度では成人女性群106名、女子学生群103名の計209名であり、自我同一性尺度では成人女性群102名、女子学生群119名の計221名であった。なお両方の尺度に不備なく回答した被調査者は、成人女性群が91名、女子学生群が101名の計192名であった。

測度

ソーシャル・サポート 福岡・橋本 (1993) の尺度から8項目(「アドバイス・指導」「なくさめ・はげまし」「物質的・金銭的援助」「具体的行動による援助」の4内容より各2項目)を抜粋して用いた(項目内容はAppendixを参照)。回答方法としては、それぞれの項目を疑問文の形式に改めた上で、Sarason, Levine, Basham, & Sarason (1983) のSSQを参考に、各項目について(1)該当する人(サポート源)を最高9名まで挙げさせ、さらに(2)そうした人々との関係全体についてどの程度満足しているか、6件法(「1.とても不満」から「6.とても満足」)で評定するよう求めた。サポート源に関しては、家族・親戚など血縁者の場合には実母、きょうだい、義父など関係の種類による記入を求め、友人など非血縁者の場合にはイニシャルやあだ名でも可とした。なお同一の関係ないしイニシャルの場合には、区別が可能なように通し番号をつけることとした。

自我同一性 Rasmussen (1961, 1964) による自我同一性尺度の日本語版(宮下, 1987)を用いた。この測度は、Erikson (1959) の発達漸成図式における ~ 段階(基本的信頼感対不信感、自律性対恥・疑惑、自主性対罪悪感、勤労性対劣等感、同一性対同一性拡散、親密性対孤立 以下、本文中ではそれぞれ「信頼感」「自律性」「自主性」「勤労性」「同一性」「親密性」と表記する)に対応する6つの下位尺度からなり、下位尺度別及び全体での得点が算出される。本調査では、宮下(1987)の計72項目(各下位尺度12項目)を用いた。評定方法は「1.全くそう思わない」から「7.全くその通りである」までの7件法であった。なお宮下(1987)では男女大学生を対象に、同一性混乱尺度(砂田, 1979)、特性不安尺度(清水・今栄, 1981)、自尊心尺度(根元, 1972)との関係からみた妥当性が報告されている。

実施方法

成人女性群については、1994年9月中旬に第2筆者の知人を通じて回答を依頼し、後日回収した。女子学生群については、同年10月中旬にD大学の「心理学」受講者に対して調査への協力を求め、原則として1週間以内に提出させた。

結 果

ソーシャル・サポート尺度についての分析

予備的分析 - 尺度の信頼性 最初に、ソーシャル・サポート尺度について予備的分析をおこなった。すなわち、サポート源の人数と満足度の両指標について尺度の内的整合性を検討するため、成人女性群、女子学生群別に、Cronbachの係数を算出した。サポート源の人数については、全体での人数のほか、被調査者のイニシャルないし間柄の記述に基づいて、血縁者と非血縁者別にも集計した。なお、福岡・橋本(1993)ではこの尺度の原版は本来4つの内容から構成されているが、そこでは因子分析ではなくクラスター分析による内容の分類が試みられていること、知覚されたサポートに関する尺度ではしばしばその内容が経験的に区別されず(例えば久田・千田・箕口, 1989)、福岡・橋本(1995b)でも下位尺度間の弁別性が必ずしも

十分ではないこと、さらに、本研究のデータについて成人女性、女子学生別にサポート源の人数（全体、血縁者、非血縁者）、満足度の各指標でそれぞれ主成分分解の因子分析をおこなったところ、回転前の第1因子の説明率が38～50%と際だって高く、回転後も元の4内容がそのままの形で再現されないことから、本研究では8項目全体での信頼性の検討をおこなうものとした。その結果、サポート源の人数（全体、血縁者、非血縁者）、サポート源に対する満足度のいずれにおいても係数は0.75以上の値を示し、ほぼ満足し得る内的整合性の高さが確認された（Table1）。なお血縁者として挙げられていたのは、成人女性では夫や父母、きょうだい、

Table 1 ソーシャル・サポート指標の α 係数

指 標	成人女性	女子学生
サポート源の人数：全 体	.85	.85
血 縁 者	.84	.80
非血縁者	.78	.75
サポート源への満足度	.91	.90

成人女性：n = 106，女子学生：n = 103

女子学生では両親と祖父母がその大半を占めていた。

成人女性と女子学生の比較 続いて、成人女性と女子学生の各群別に、それぞれのサポート指標の平均値を算出し、群間差のt検定をおこなった（Table2）。その結果、サポート源の人数については、全体でみると両群に差がないものの、血縁者では成人女性が、非血縁者では女子学生が有意に多くの人を挙げていることが示された。そこで、関係の種類（血縁、非血縁）×サンプル（成人、学生）の2要因分散分析をおこなったところ顕著な交互作用がみられ（ $F(1,207) = 71.98, p < .001$ ）、下位検定の結果、血縁者では成人女性、非血縁者では女子学生のサポート源が多いこと（それぞれ $F(1,207) = 40.67$ と 31.59 、ともに $p < .001$ ）に加えて、成人女性では血縁者、女子学生では非血縁者を多く挙げていることが確認された（それぞれ $F(1, 414) = 64.81$ と 16.07 、ともに $p < .001$ ）。サポート源への満足度については両群の得点に有意差はなく、平均値としてはともに「やや満足」あるいは「かなり満足」あたりの評定値を示していた。

なお、指標間の関係としては、サポート源の人数（全体）と満足度との間には正の相関がみられたが（成人女性： $r = .36, p < .001$ ，女子学生： $r = .26, p < .01$ ）、血縁者と非血縁者の人数はほぼ無相関であった（成人女性： $r = -.01$ ，女子学生： $r = -.02$ 、ともにn.s.）。なお、成人女性

Table 2 ソーシャル・サポート指標の平均値とSD，群間のt検定結果

指 標	成人女性		女子学生		t 値 (df = 207)
	平均	SD	平均	SD	
サポート源の人数：全 体	37.46	12.59	36.54	11.94	0.54 n.s.
血 縁 者	23.59	9.27	15.85	7.48	6.64 ¹ ***
非血縁者	13.87	8.58	20.69	9.42	5.48 ***
サポート源への満足度	37.91	5.77	38.89	6.09	1.20 n.s.

成人女性：n = 106，女子学生：n = 103

*** $p < .001$, ** $p < .01$ * $p < .05$, + $p < .10$

¹ 分散が等質でなかったためウェルチの方法によった（df = 200）

では血縁者の人数よりも非血縁者の人数の方が満足度と強い相関がみられた ($r = .17, p < .10$ と $r = .34, p < .001$)。女子学生ではこれと逆の傾向ながら、いずれも弱い相関であった ($r = .22, p < .05$ と $r = .16, p < .11$)。

自我同一性尺度についての分析

予備的分析 - 尺度の再検討と信頼性 宮下 (1987) の自我同一性尺度は、大学生のみを対象として項目分析がおこなわれており、また一部に内的整合性がそれほど高くない下位尺度がみられる。そこで本研究では、最初に成人女性群、女子学生群の双方で各下位尺度において当該項目を除いたときの係数を算出し、不適切な項目を順次削除しながら、両群における係数が最も高くなる項目の組み合わせを調べた。なお、本研究では、全体での因子分析はおこなわなかったが、その理由は、Rasmussen (1961, 1964) の原版、宮下 (1987) の日本語版とともに全72項目の因子構造にもとづいて下位尺度を構成するという手続きはとられていないこと、そして、そもそもErikson (1959) の図式において、それぞれの発達段階は決して独立ではなく、前段階の危機を解決することが次の段階の発達を促し、また後の段階においてもそれ以前の危機を解決していく可能性のあることが概念的にも示唆されていること、等を考慮したためである。ただし、この場合でも各尺度を構成する項目により合成得点を算出する前提として、尺度の内的な整合性の基準は最低限満たしている必要があると思われたため、上記の手順により項目の選択をおこなった。その結果、各下位尺度とも1～3項目が削除され、最終的に59項目が残された。採用された項目による各尺度の係数と削除項目は、Table3に示されている。これらの係数は十分に高いとはいえないが、いずれも0.60以上の値を示し、以後の分析に耐

Table 3 自我同一性尺度の係数と削除項目

尺度 (項目数)	成人女性	女子学生	削除項目 ¹
基本的信頼感 - 不信 (11)	.63	.62	1
自律性 - 恥, 疑惑 (9)	.68	.67	61, 70, 71
自主性 - 罪悪感 (9)	.60	.60	47, 54, 57
勤勉性 - 劣等感 (10)	.70	.78	4, 55
同一性 - 同一性拡散 (11)	.70	.67	50
親密性 - 孤立 (9)	.67	.70	10, 14, 37
6尺度全体 (59)	.83	.78	

成人女性 : $n = 102$, 女子学生 : $n = 119$

¹ 数字は宮下 (1987) に掲載されている項目番号

えうるものであると判断された。

成人女性と女子学生の比較 上記の手続きを経て構成された自我同一性尺度にもとづいて、その下位尺度別及び全体での得点を成人女性群、女子学生群それぞれについて算出し、さらに t 検定により両群の得点を比較した。なお下位尺度については評定の平均値を、全体での得点は下位尺度の平均値を指標とした。これは各下位尺度を構成する項目数が異なるためである。その結果、全ての尺度で成人女性群の得点が高く、統計的にも第3段階の「自主性」を除く5つの下位尺度と全体得点で、5～0.1%水準での有意差がみられた (以上Table4を参照)。これらの結果は、自我同一性の発達のな変化を裏付けるものであり、また同時に、今回使用した尺

Table 4 自我同一性尺度の平均値とS D, 群間のt検定結果

尺度 (項目数)	成人女性		女子学生		t 値 (df = 219)
	平均	S D	平均	S D	
基本的信頼感 - 不信 (11)	4.66	0.66	4.43	0.64	2.60 *
自律性 - 恥, 疑惑 (9)	4.56	0.79	4.03	0.72	5.20 ***
自主性 - 罪悪感 (9)	4.64	0.71	4.49	0.72	1.57 n.s.
勤勉性 - 劣等感 (10)	4.53	0.76	4.30	0.85	2.09 *
同一性 - 同一性拡散 (11)	4.74	0.73	4.23	0.71	5.28 ***
親密性 - 孤立 (9)	4.70	0.75	4.38	0.75	3.18 **
6尺度全体 (平均) (59)	4.64	0.54	4.31	0.51	4.65 ***

成人女性 : n = 102, 女子学生 : n = 119

*** p < .001, ** p < .01 * p < .05, + p < .10

度が成人女性にも適用可能であることを示すものといえる。

同一性とソーシャル・サポートの関連性

自我同一性尺度とソーシャル・サポート指標の相関関係 自我同一性とソーシャル・サポートの両尺度に回答したデータについて, 両指標間のピアソン相関係数を算出した (Table 5). 成人女性, 女子学生の両群とも, サポート源への満足度と非血縁者の人数を中心に, 自我同一性の各尺度と有意な相関を示した. 自主性, 勤勉性など, サポート源の人数に関していえばどちらかといえば女子学生の方がやや相関が強いようであり, 同一性6尺度の全体得点でも同様であった. とりわけ第5段階である「同一性」の尺度では, 女子学生の場合血縁者の人数を含

Table 5 ソーシャル・サポート指標と自我同一性尺度の相関

サポート指標	自我同一性尺度						
	信頼感	自律性	自主性	勤勉性	同一性	親密性	全体
(成人女性)							
人数 : 全体	.22 *	.04	.26 *	.07	.08	.28 **	.21 *
血縁者	.07	-.14	.09	-.03	-.11	-.05	-.05
非血縁者	.25 *	.21 *	.28 **	.14	.25 *	.47 ***	.37 ***
満足度	.38 ***	.24 *	.42 ***	.24 *	.31 **	.33 ***	.43 ***
(女子学生)							
人数 : 全体	.22 *	.25 *	.36 ***	.25 *	.38 ***	.37 ***	.43 ***
血縁者	.11	.08	.17 +	.14	.29 **	.09	.20 *
非血縁者	.20 *	.25	.33 ***	.21 *	.25 *	.41 ***	.38 ***
満足度	.36 ***	.36 ***	.24 *	.21 *	.33 ***	.39 ***	.44 ***

成人女性 : n = 91, 女子学生 : n = 101

*** p < .001, ** p < .01 * p < .05, + p < .10

む全てのサポート指標と有意な相関をもち、同一性の達成度が高いほど、サポート関係が豊かであり満足度も高いことが示された。

自我同一性のパターンによる類型化とソーシャル・サポート さらに、自我同一性尺度で測定される6つの発達課題の達成度をパターンとしてとらえる目的から、成人女性、女子学生のそれぞれについて、自我同一性の各下位尺度の標準得点を用いたWARD法によるクラスター分析をおこなった。そして、見出された各クラスターにおけるサポート指標の比較を通じて、自我同一性とソーシャル・サポートの関連性についてさらなる検討を試みた

(1) 成人女性 樹状図の構造、クラスター結合時の統計量の推移及び各類型に属する人数を勘案し、Figure 1に示す4クラスター解を採用した。なお、図中の第3と第4、第1と第2クラスター結合時のSemipartial R^2 はそれぞれ.066と.068であり、全クラスター結合時では.359であった。これら4クラスターを水準とする1要因分散分析では、自我同一性6尺度の標準得点には全て有意差があり ($F(3,87) = 16.48 - 41.69$, いずれも $p < .001$)、Tukey法の多重比較では、「信頼感」「自律性」ではクラスター3と4、「自主性」「勤勉性」では同2と4、「同一性」「親密性」では同1と2、3と4を除くクラスター間で5%水準の有意差が確認された。これらの分析及びFigure1上段から明らかのように、クラスター3と1が全体的な同一性達成の高、低群に相当し、またクラスター2と4を比べると、第3、第4段階の「自主性」「勤勉性」では差がみられないのに対して、その他の下位尺度、とりわけ第5、第6段階の「同一性」「親密性」についてはクラスター2が低同一性達成群、クラスター4では高同一性達成群に近いことがわかる。

そこで、これら4クラスターにおける各サポート指標の標準得点を算出し (Figure1の下段を参照)、それぞれ同様の1要因分散分析をおこなった。その結果、非血縁者の人数と満足度において要因の効果がみられた (それぞれ $F(3,87) = 4.14$, $p < .01$ と $F(3,87) = 7.08$, $p < .001$)。

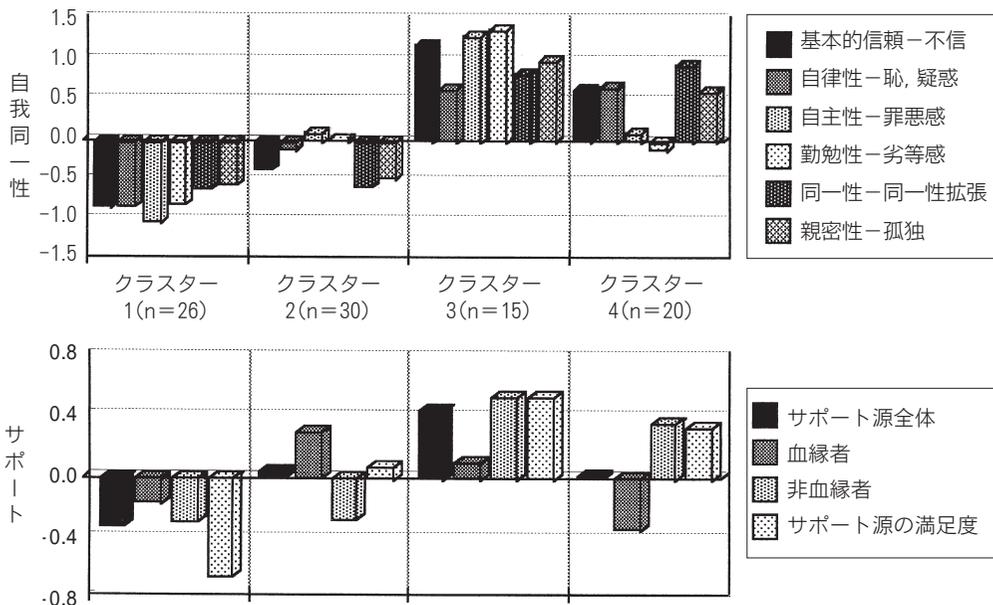


Figure 1 自我同一性のパターンによる成人女性の4クラスターにおける各指標の標準得点

全体および血縁者の人数では、数値としてはクラスター間に差異がみられたが、統計的な有意水準には達していなかった（それぞれ $F(3,87) = 1.90, p < .14$ と $F(3,87) = 1.99, p < .13$ ）. Tukey法による多重比較の結果、非血縁者の人数ではクラスター1と3及び2と3の間に、満足度ではクラスター1と他の3つのクラスターとの間に5%水準での有意差が見出された。全体としての自我同一性の達成度が高いほど、サポート源としての非血縁者の人数や満足度が高くなっていた。また統計的には必ずしも有意ではなかったが、クラスター2と4を比較すると、低同一性達成群に近い前者では血縁者の、高同一性達成群に近い後者では非血縁者の比重が相対的に大きいネットワークをもつことが示唆された（Figure1を参照）。

(2) 女子学生 成人女性と同様の基準にもとづいて、ここでも4クラスター解を採用した（Figure2を参照）。なお、図中の第2、第3クラスター結合時のSemipartial R^2 は.072、これに第1クラスターが結合する時の同値は.078であり、全クラスター結合時では.322であった。これら4クラスターを水準とする1要因分散分析では、自我同一性6尺度の標準得点に全て有意差があり（ $F(3,97) = 13.76 - 63.58$ 、いずれも $p < .001$ ）、Tukey法の多重比較では、「信頼感」「自主性」ではクラスター1と3、「自律性」では同1と2、3と4、「勤勉性」では同3と4、「同一性」「親密性」では同1と2、1と3を除くクラスター間で有意差が確認された。これらの分析及びFigure2上段から明らかなように、クラスター4と1が全体的な同一性達成の高、低群に相当し、クラスター2は人数が最も多くどの側面もほぼ平均的な傾向を示しており、これに対しクラスター3は少人数ではあるが「信頼感」「自主性」「親密性」は低く「自律性」「勤勉性」「同一性」は高い特徴的な傾向をもつことがわかる。

そこで、これら4クラスターにおける各サポート指標の標準得点を算出し（Figure2の下段を参照）、それぞれ同様の1要因分散分析をおこなった。その結果、サポート源の人数に関する3指標（全体、血縁者、非血縁者）及び満足度の全てにおいて、有意ないし有意傾向（10%

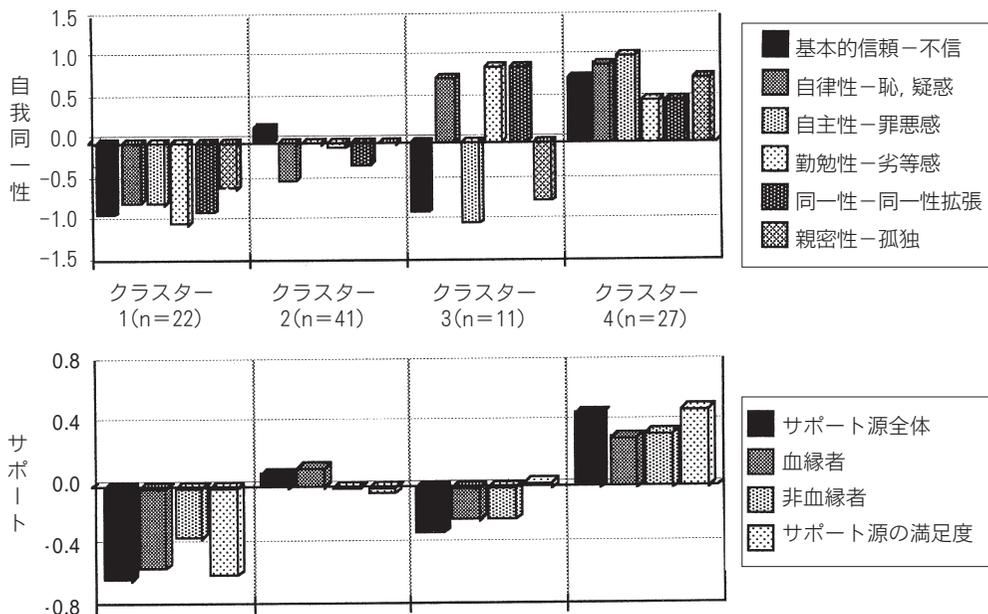


Figure 2 自我同一性のパターンによる女子学生の4クラスターにおける各指標の標準得点

水準)による要因の効果がみられた(それぞれ $F(3,97) = 5.85, 3.69, 2.18, 5.23, p < .001, .05, .10, .001$). Tukey法の多重比較によれば, 全体及び血縁者の人数ではクラスター1と2, 4の間, 満足度ではクラスター1と4の間に5%水準での有意差が確認された. 非血縁者の人数については個別のクラスター間での有意差はみられなかった. 全体としての自我同一性の達成度が高いほど, サポート源の人数が多く, 満足度も高かった. 特にサポート源については, 成人女性でみられた非血縁者の多さに加え, 血縁者においても同様に人数が多かった. また自我同一性の特徴的なパターンを示したクラスター3については, 統計的には必ずしも顕著ではなかったが, 若干血縁者を中心としてサポート源の人数が少なくなる傾向が示唆された(Figure 2を参照).

考 察

本研究の目的は, 成人女性と女子学生におけるソーシャル・サポート・ネットワークの基本的な特徴を明らかにし, 青年期後期から成人期にかけての発達の変化に関する記述的な知見を提供することであり, また, 適切なサポート関係を形成していくための1つの発達的な基盤として自我同一性の概念を位置づけ, それぞれの心理社会的な発達課題の達成という観点からみた同一性の諸側面とソーシャル・サポートとの関連性を検討することであった.

まず前者については, 全体的なサポート源の人数, 及びサポート源に対する満足度の点からは, 成人女性と女子学生の違いは見出されなかった. ネットワークの大きさとしては両者はほぼ同様であり, また主観的な評価の点でも, ともにある程度の満足を得ているといえる. しかしネットワークを構成する関係の種類については, 両者は対照的であった. すなわち, 成人女性では夫やその他の親族による血縁者との関係が過半数を占め, 一方女子学生では, 友人を主とする非血縁者との関係が相対的に大きな比重を占めていた. またサポート源の人数と満足度との関係では, 全体として両群とも正の相関がみられたが, 特に成人女性の場合には, 非血縁者の人数が多いほど満足度が高く, 血縁者の人数との関連性はそれに比べ弱いものであった. 本研究の対象者となった既婚の中年女性の場合には, 川浦・池田・伊藤・本田(1996)の結果からも一部示唆されるように, 家族や親戚を中心とする対人関係が形成され, 特にフルタイムの就労形態をとらない女性の場合には, 友人その他との関係は, 子どもや地域社会を介した, ややもすれば間接的なものとなりがちであると思われる. また, 満足度との関連では, 特に既婚女性における血縁者との関係には, 部分的にせよ義務的な性質が含まれており, またBelle(1982)が指摘しているような, サポートの受け手としてと同時に送り手としての側面が強いために, ネットワークの広さが満足度と強い結びつきをもたないという結果として現れたのであろう. これに対して女子学生の場合には, 例えば福岡・橋本(1995a)の結果からも示唆されるように, 家族との心理的な結びつきを維持しつつも大学生活の中で友人との自由なつながりを拡大・深化させていく時期であると思われる. ただし, 満足度との関連性がそれほど強いものではなかった点からみても, 単なるサポート・ネットワークの大きさが直接心理的な適応に寄与するとは限らないであろう. ソーシャル・サポート研究における従来からの中心的なテーマといえる生活ストレスや心身の健康状態と本研究で用いられたサポート・ネットワークの構造やそれへの主観的評価との関係についても, 今後検討していかねばならない.

後者の目的, すなわち自我同一性とソーシャル・サポートの関連性については, 本研究では

尺度間の相関関係と、自我同一性のパターンによる類型別にみたサポート指標の特徴、という2つの側面から検討した。総じてみると、これらの結果はCaldwell et al. (1989) の報告ともある程度一致して、自我同一性の達成度が高い人ほど豊かで満足し得るサポート関係をもつことを示すものといえるが、それぞれの分析によって若干の特徴ある結果が見出された。

まず尺度間の相関では、自我同一性の各側面は、いずれもサポート関係についての満足度、及びサポート源としての非血縁者の人数と、ほぼ一貫して正の相関をもつことが見出された。特に注目してよいと思われるのは、概念的にソーシャル・サポートの指標と若干類似する「親密性」以外の側面でも、この関連性がほぼ同レベルの強さで見出されたことである。このことは、自我同一性の発達を、適切なソーシャル・サポート関係の形成に対する1つの発達の基盤として位置づけることの妥当性を示唆しているものと思われる。とりわけ友人をはじめとする非血縁者との好ましい関係は、義務的に形成・維持されるものではなく、互恵的な相互依存性の理解があって初めて成り立つものであり、自我同一性の発達が満足しうる広範なサポート関係の形成をもたらす基礎となることは十分に納得できることと思われる。また、女子学生の場合に「同一性」が血縁者の人数を含む全てのサポート指標と有意な関連性を示したことは、特にこの年代における発達課題としての重要性を強く示唆するものといえよう。青年期の後期は、Blos (1962) の指摘からも示唆されるように、両親との独立・依存の葛藤を経て同一性を確立することが求められる。その意味で、この時期に特有の心理社会的な危機の解決は、それ以前からの家族を中心とする血縁者との関係についても、また新たな友人との関係についても、意味ある自己概念の基盤を提供するのであろう。

自我同一性をパターンとしてとらえることを意図したクラスター分析の結果、成人女性及び女子学生ともに4つのクラスターが見出された。その中には、全体として自我同一性の達成度が高い、あるいは低いものに加え、それぞれに特徴的なクラスターが含まれていた。被調査者数の関係もあり統計的には必ずしも明瞭とはいえないものの、成人女性では、「同一性」「親密性」が低い場合には他の側面が平均的なレベルでもサポート関係が血縁者に偏り、逆のパターンではむしろ非血縁者が中心となることが示唆された。また女子学生では「同一性」が高くて「信頼感」や「自主性」が際だって低い群が少数ながら見出され、この場合にはサポート・ネットワークの広がりが相対的に乏しいことが示唆された。これらの結果は、サポート関係の形成にとって自我同一性の様々な側面がバランスよく達成されることの重要性を示唆するとともに、各段階における危機の解決度が異なる人が現に存在し、自我同一性の達成度を単に一次的にみるのではなく、種々の側面が組合わさったパターンとしてとらえることにより、心理社会的な発達について新たな情報を得ることができる可能性を示している。もちろん本研究の試みは、こうした分析がまだ適用されていない現段階では探索的なものであり、見出された類型の一般性は、今後の研究によって確かめていかねばならない。しかし、Eriksonのいうそれぞれの心理社会的な危機の解決は、決して固定した順序でのみ生じるわけではなく、その意味で本研究のような分析のアプローチは概念的にみても決して矛盾するものではないと思われる。

このように、本研究は成人女性と女子学生におけるサポート・ネットワークのあり方について記述的な知見を提供し、また適切なサポート関係を形成する発達の基盤の1つとしての自我同一性概念の有用性を示唆するものである。今後の課題としては、より大規模かつ多様なサンプルにおいて今回の結果の追証可能性を確かめること、中・高校生や20代後半から30代といった本研究で対象とされていない年齢層での検討によりその発達のな変化をより詳細に記述する

こと、自我同一性のパターンによるソーシャル・サポートのあり方の違いが生活ストレスへの対処や心理的適応に及ぼす影響を明らかにすること、などが挙げられよう。また自我同一性研究で最近特に操作化の主流となっている Marcia (1966) の同一性地位とソーシャル・サポートとの関連性についても、Caldwell et al. (1989) で一部取り上げられているとはいえ、さらに検討する余地があろう。もちろん、自我同一性を含む自己概念の発達と対人関係のあり方は、本来相互的な影響性をもつものであり、その両面からの検討も必要である（例えば金子，1995；宮下・渡辺，1992；高橋，1992を参照）。とりわけ、ライフ・サイクルの移行期（入学，就職，子どもの卒業，退職など：山本・ワップナー，1992を参照）における従来の対人関係及び自己概念のあり方を基礎とした新しい関係の形成とそれに伴う自己概念の変化をとらえることは、特に有意味であろう。本研究は、サポート関係の発達的变化、及びその基礎の1つとしての自我同一性とソーシャル・サポートの関連性を示すものであるが、両者の相互関係をよりいっそう明らかにするために、上述のような将来の発展的研究に向けた1つのステップとして位置づけることができるように思われる。

引用文献

- Adams, G. R., Shea, J., & Fitch, S. A. 1979 Toward the development of an objective assessment of ego-identity status. *Journal of Youth and Adolescence*, 8, 223-237.
- Antonucci, T. C. 1985 Personal characteristics, social support, and social behavior. In R. H. Binstock & E. Shanas (Eds.) *Handbook of aging and the social sciences*. (2nd ed.) New York: Van Nostrand-Reinhold. Pp.94-128.
- Antonucci, T. C., & Jackson, J. S. 1989 Successful aging and life course reciprocity. In A. M. Warnes (Ed.) *Human aging and later life*. London: Hodder & Stoughton. Pp. 83-95.
- Barbee, A. P., Cunningham, M. R., Winstead, B. A., Derlega, V. J., Gulley, M. R., Yankeelov, P. A., & Druen, P. B. 1993 Effects of gender role expectations on the social support process. *Journal of Social Issues*, 49(3), 175-190.
- Belle, D. 1982 The stress of caring: Women as providers of social support. In L. Goldberger & S. Breznitz (Eds.) *Handbook of stress: Theoretical and clinical aspects*. New York: Free Press. Pp.496-505.
- Belle, D. (Ed.) 1989 *Children's social networks and social support*. New York: Wiley.
- Blos, P. 1962 *On adolescence: A psychoanalytic interpretation*. New York: Free Press.
(ピーター・ブロス 野沢栄司訳 1971 青年期の精神医学 誠信書房)
- Burda, P. C., Jr., & Vaux, A., & Schill, T. 1984 Social support resources: Variation across sex and sex role. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 10, 119-126.
- Caldwell, R. A., Bogat, G. A., & Cruise, K. 1989 The relationship of ego identity to social network structure and function in young men and women. *Journal of Adolescence*, 12, 309-313.
- Cohen, S., & Syme, S. L. (Eds.) 1985 *Social support and health*. Orland: Academic

Press.

Cohen, S., & Wills, T. A. 1985 Stress, social support, and the buffering hypothesis. *Psychological Bulletin*, 98, 310-357.

Coyne, J. C., & Downey, G. 1991 Social factors and psychopathology: Stress, social support, and coping resources. *Annual Review of Psychology*, 42, 401-425.

Erikson, E.H. 1950 (2nd enlarged ed. 1963) *Childhood and society*. New York: Norton. (仁科弥生訳 1977, 1980 幼児期と社会・みすず書房)

Erikson, E.H. 1959 Identity and the life cycle : Selected papers. In *Psychological Issues* . Vol.1. New York: International Universities Press. (小此木啓吾(訳編) 1973 自我同一性 誠信書房)

Flaherty, J., & Richman, J. 1989 Gender differences in the perception and utilization of social support: Theoretical perspectives and an empirical test. *Social Science and Medicine*, 28, 1221-1228.

福岡欣治・橋本 宰 1993 クラスター分析によるサポート内容の分類とその効果 日本心理学会第57回大会発表論文集, 157.

福岡欣治・橋本 宰 1995a 大学生における家族および友人についての知覚されたサポートと精神的健康の関係 教育心理学研究, 43, 185-193.

福岡欣治・橋本 宰 1995b 内容別にみた知覚されたサポートの効果について 同志社心理, 42, 11-22.

久田 満 1987 ソーシャル・サポート研究の動向と今後の課題 看護研究, 20, 170-179.

久田 満・千田茂博・箕口雅博 1989 学生用ソーシャル・サポート尺度作成の試み (1) 日本社会心理学会第30回大会発表論文集, 143-144.

金子俊子 1995 青年期における他者との関係のしかたと自己同一性 発達心理学研究, 6, 41-47.

川浦康至・池田政子・伊藤裕子・本田時雄 1996 既婚者のソーシャルネットワークとソーシャルサポート 女性を中心に 心理学研究, 67, 333-339.

Kegan, R.G. 1979 The evolving self: A process conception for ego psychology. *Counseling Psychologist*, 8(2), 5-34.

Marcia, J. E. 1966 Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, 3, 551-558.

宮下一博 1987 Rasmussenの自我同一性尺度の日本語版の検討 教育心理学研究, 35, 253-258.

宮下一博・渡辺朝子 1992 青年期における自我同一性と友人関係 千葉大学教育学部研究紀要(第1部), 40, 107-112.

森 和代・堀野 緑 1992 児童のソーシャルサポートに関する一研究 教育心理学研究, 40, 402-410.

根元橋夫 1972 対人認知に及ぼすSelf-Esteemの影響 () 実験社会心理学研究, 12, 68-77.

野口裕二 1991 高齢者のソーシャルサポート: その概念と測定 社会老年学, 34, 37-48.

Rasmussen, J.E. 1961 An experimental approach to the concept of ego identity as

- related to character disorders. *Dissertation Abstracts*, 22(5-A), 1911-1912.
- Rasmussen, J. E. 1964 Relationship of ego identity to psychosocial effectiveness. *Psychological Reports*, 15, 815-825.
- 佐方哲彦 1985 青年期の同一性形成 E P S I による発達課題の達成過程の解明 青少年問題研究, 34, 49-64.
- Sarason, I.G., Levine, H.M., Basham, R.B., & Sarason, B.R. 1983 Assessing social support: The Social Support Questionnaire. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 127- 139.
- 清水秀美・今栄国晴 1981 STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORY の日本語版 (大学生用) の作成 教育心理学研究, 29, 348-353.
- 砂田良一 1979 自己像との関係からみた自我同一性 教育心理学研究, 27, 215-220.
- 高橋裕行 1992 家族的, 先行する心理社会的要因の同一性の発達におよぼす影響 福井大学教育学部紀要 (教育科学), 43, 23-49.
- Takahashi, K. 1990 Affective relationship and their lifelong development. In P.B. Baltes, D.L. Featherman, & R.M. Lerner (Eds.) *Life-span development and behavior*. Vol.10. Hillsdale: Lawrence Erlbaum Associates. Pp.1-27.
- 鐘幹一郎・山本 力・宮下一博 (編) 1984 自我同一性研究の展望 (シンポジウム青年期 3) ナカニシヤ出版
- Thoits, P.A. 1991 Gender differences in coping with emotional distress. In J. Eckenrode (Ed.) *The social context of coping*. New York: Plenum Press. Pp.107-138.
- Veiel, H.O.F., & Baumann, U. (Eds.) 1992 *The meaning and measurement of social support*. New York: Hemisphere.
- Wohlgemuth, E., & Betz, N. E. 1991 Gender as a moderator of the relationships of stress and social support to physical health in college students. *Journal of Counseling Psychology*, 38, 367-374.
- 山本多喜二・S・ワップナー (編著) 1992 人生移行の発達心理学 北大路書房
〔2000年10月26日 受理〕

Appendix ソーシャル・サポートの測定項目

-
- (1) あなたがやっかいな問題に頭を悩ませているとき、冗談を言ったり一緒に何かやったりして、あなたの気をまぎらわせてくれそうな人は誰ですか
 - (2) あなたが忙しくしているとき、ちょっとした用事（家事や簡単な仕事など）の手助けをしてくれそうな人は誰ですか
 - (3) あなたが精神的なショックで動揺しているとき、なぐさめてくれそうな人は誰ですか
 - (4) あなたが緊急にかなり多額のお金を必要とするようになったとき（家賃や学費の支払い、事故の弁償など）、そのお金を出してくれそうな人は誰ですか
 - (5) あなたが学校や職場、地域、家庭などでの人間関係について悩んでいるとき、それについて相談にのってくれそうな人は誰ですか
 - (6) あなたが病気で数日間寝ていなくてはならないとき、看病や世話をしてくれそうな人は誰ですか
 - (7) あなたが財布をなくしたり物をこわした弁償などで急に数千円必要になったとき、そのお金を貸してくれそうな人は誰ですか
 - (8) あなたが自分にとって重要なこと（たとえば進学や就・転職、長期ローンを組むべきかなど）を決めなくてはならないとき、アドバイスしてくれそうな人は誰ですか
-